愛媛大学教育学部紀要　教育科学　第49巻　第2号　79～86　2003

母性意識質問紙による育児環境ハイリスクマザーの早期発見に関する研究
―― 母性意識質問紙の信頼性・妥当性の検討 ――

久　保　由美子
（障害児教育講座　非常勤講師）
長　尾　秀　夫
（障害児教育講座）
宮　内　清　子
（愛媛県立医療技術短期大学）

（平成14年10月17日受理）

Early Screening of Mothers with Child-Rearing Environmental Risks by the Maternal Consciousness Questionnaire
—— A Report on Reliability and Validity of the Maternal Consciousness Questionnaire ——

Yumiko KUBO, Hideo NAGAO and Kiyoko MIYAUCHI

［論文要旨］

ハイリスクマザーの評価と支援のために，母親の育児不安・不満感，育児満足感，夫のサポート感に関する母性意識質問紙を作成し，乳幼児健診の場において質問紙を実施してきている。本研究では地域保健活動の場において，ハイリスクマザーを早期発見する上で，本質問紙が有用であるかを考察するために，乳幼児をもつ母親の母性意識質問紙の信頼性と妥当性について検討した。項目の信頼性では，１回目と２回目の安定性の相関は高く，項目間に一貫性がみられた。項目の妥当性では，４カ月，１歳６カ月，３歳の３時点において，各項目と因子別総得点との間に高い正の相関が認められた。以上から，育児不安・不満感の高い母親，育児満足感の低い母親，夫のサポート感の低い母親を早期に把握するために，本質問紙の活用が可能であることが明らかとなった。

Key words：ハイリスクマザー，早期発見，育児不安感，育児満足感，夫のサポート感

I はじめに

少子化，核家族化，受験戦争，情報氾濫など子どもを取りまく環境の変化にともなり，不登校，いじめ，校内暴力，家庭内暴力，摂食障害，薬物乱用，虐待など子どもの心の問題が増加してきている（厚生省，1999)。そして，子どもの心の傷は次の世代にも引き継がれ，発生予防にはライフサイクルの視点での対応が必要になってきている。わが国の母子保健行政においては，「健やか親子21」の運動の柱の一つに，「子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減」をあげ，育児環境面からの支援，すなわち親の育児不安を除きのびのび楽しい育児ができる取り組みを提唱しており，小児医療・保健の立場からの育児不安軽減への取り組みとして周産期からの支援や出生前小児保健指導による早期介入が行われてきている（吉永，2002；小川，2002)。1980代以降，育児不安に関する研究が行われ，近年，育児不安尺度・評価に関する研究も行われてきているが（牧野，1982；1988；川井他，1997；1998；1999；2000；2001；吉田他，1999)，地域保健活動の場における実践的な研究は少ない。

著者らは，地域保健活動の場において子どもの将来の発達の遅れとメンタルヘルスに関与する環境的危険性の高いリスク児を早期に把握し，リスク児とその家族に対して早期介入を試みてきている（久保・長尾，1996；1997；1999)。最近，乳幼児健診において，「子どもとどうかかわっていいかわからない」，「子どもと遊ぶことが苦痛である」，「子どもがかわいくない」など育児不安の高い母親や母子相互作用行動が少ない母親に出会う機会が多い。乳幼児のメンタルヘルスにとって家庭養育環境は重要であり，家族的リスク要因（表１）の高いハイリスクマザーを早期に発見し早期に介入することが必要であると考える。著者らは地域保健活動におけるハイリスクマザーの評価と支援のために，母親の育児不安・不満感，育児満足感，夫のサポート感に関する母性意識質問紙を作成し，乳幼児健診の場において質問紙を実施してきている。本研究では地域保健活動の場において，ハイリスクマザーを早期発見する上で，著者らが作成した母性意識質問紙が有用であるか考察するために，質問紙の信頼性と妥当性について検討した。

表１　家族的リスク要因（Sameroff，1993）

リスク要因	高いリスク
1．母親のメンタルヘルス	精神症状がある
2．母親の年齢	10代（思春期マザー）
3．母親の育児不安	高い
4．母親の育児能力	低い
5．母親の相互作用的行動	少ない
6．家庭環境の質	家庭環境刺激が少ない
7．ストレス的な生活体験（家族の不幸，虐待など）	多い
8．家庭の生活状態	貧困
9．家族の社会的サポート	父親がいない（未婚）
10．家族構成数	同胞数が多い（４人以上） 同居家族が多い

II 対象と方法

対象は1997～2000年度にＡ市で実施している乳幼児健診を受診した乳幼児の母親である。方法は母性意識に関する質問紙を郵送し，健診時に回収した。また，質問紙の信頼性について検討するために，2000年度において母性意識に関する質問紙を郵送時だけでなく健診時にも再

度記入を依頼した。

母性意識に関する質問項目は小野・宮内・久保（1993）の母性意識項目を参考に選定し作製したもので，0歳，3歳，5歳，7歳，10歳の子どもをもつ母親に共通にみられた3因子（育児不安や不満に関するもの，育児満足感や肯定的母性に関するもの，夫婦の協力に関するもの）の中から選んだ18項目によって構成されている。母性意識項目の応答形式は「全くない」「ほとんどない」「時々ある」「よくある」の4件法により，それぞれ1，2，3，4点を与えてその因子得点とした。

統計処理は Stat View5.0，Excel 統計97を用い，母性意識の構造を明らかにするために18項目について因子分析（直交バリマックス回転）を行い，信頼性を検討するために，各因子の合計得点について，2回の結果との間でのピアソン相関係数を求めた。

Ⅲ 結　果

1．対象者

A市で実施した母性意識質問紙については，郵送した3302の中2995（90.7%）が回収された。この中で資料が完全な者は，2553名（77.3%）であり，4カ月児の母親815名（男児395名，女児420名），1歳6カ月児の母親853名（男児424名，女児429名），3歳児の母親885名（男児416名，女児469名）であった。

また，郵送時と健診時の資料のそろった者は，乳児の母78名，1歳6カ月児の母105名，3歳児の母75名，計258名であった。

2．対象者の背景

母親の年齢は，20歳未満0.9%，20歳代54.2%，30歳代43.7%，40歳代1.1%であった。母親の職業は，無職（専業主婦）75.9%，常勤11.4%，自営業（商業）3.4%，農業1.1%，パート7.1%，不明1.1%であった。また，子どもの出生順位は第1子41.9%，第2子38.0%，第3子17.5%，第4子以上2.5%であった。家族形態は，核家族が79.7%，祖父母との同居が20.3%であり，さらに母子家庭が1.4%であった。

3．分析結果

（1）因子別項目（表2～表4）

因子分析を行い固有値1以上を選択した結果，4か月，1歳6か月，3歳の3時点において固有値の高い順に「育児不安・不安感」，「育児満足感」，「夫のサポート感」と名付けられる3因子が抽出された。項目の内容は，「育児不安・不満感」9項目，「育児満足感」6項目，「夫のサポート感」3項目であった。また，因子別項目の内的整合性を示すクロンバッハα信頼性係数は0.67～0.85であり，項目間に一貫性があることを示していた。

（2）項目の信頼性（表5）

因子別得点の信頼性を検討するために，1回目と2回目の得点についてピアソンの相関係数を求めたところ，r=0.76～0.96と高い相関が認められ，安定性があることを示していた。

（3）項目の妥当性（表6）

項目の妥当性を検討するために，各項目と因子間との相関関係を求めてみたところ，4カ

表2　母性意識質問項目の因子分析（4カ月）

N=815

因子・項目	負荷量 因子1	因子2	因子3
因子1：育児不安・不満感（9項目）			
3．毎日毎日，同じことの繰り返ししかしていないと思う	0.437		
5．ひどくがっかりしたときには，なかなか気分転換ができない	0.700		
6．育児の自信がなくなる	0.649		
8．自分のやりたいことができなくて焦る	0.605		
10．自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう	0.549		
12．子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う	0.655		
14．育児ノイローゼになる心境に共感できる	0.654		
16．自分の関心・時間を子どもにとられて視野が狭くなる	0.682		
17．何となくいらいらする	0.746		
因子2：育児満足感（6項目）			
1．育児は楽しい		0.580	
4．育児は有意義な仕事である		0.678	
7．子どもをもって自分も成長した		0.611	
9．子どもはいとおしい		0.549	
13．わが子（　歳）は，愛情に素直に反応する		0.481	
15．充実感がある		0.619	
因子3：夫のサポート感（3項目）			
2．子どものことについて夫婦でよく話し合う			0.696
11．夫は，一緒に子育てをしてくれている			0.837
18．夫は家事に協力的である			0.830
固有値	4.586	2.223	1.468
寄与率（%）	25.5	12.4	8.2
累積寄与率（%）	25.5	37.8	46.0
信頼性係数α	0.823	0.671	0.725

表3　母性意識質問項目の因子分析（1歳6カ月）

N=853

因子・項目	負荷量 因子1	因子2	因子3
因子1：育児不安・不満感（9項目）			
3．毎日毎日，同じことの繰り返ししかしていないと思う	0.595		
5．ひどくがっかりしたときには，なかなか気分転換ができない	0.661		
6．育児の自信がなくなる	0.680		
8．自分のやりたいことができなくて焦る	0.680		
10．自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう	0.573		
12．子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う	0.710		
14．育児ノイローゼになる心境に共感できる	0.627		
16．自分の関心・時間を子どもにとられて視野が狭くなる	0.688		
17．何となくいらいらする	0.732		
因子2：育児満足感（6項目）			
1．育児は楽しい		0.632	
4．育児は有意義な仕事である		0.620	
7．子どもをもって自分も成長した		0.613	
9．子どもはいとおしい		0.619	
13．わが子（　歳）は，愛情に素直に反応する		0.612	
15．充実感がある		0.643	
因子3：夫のサポート感（3項目）			
2．子どものことについて夫婦でよく話し合う			0.758
11．夫は，一緒に子育てをしてくれている			0.897
18．夫は家事に協力的である			0.817
固有値	5.177	2.243	1.617
寄与率（%）	28.8	12.5	9.0
累積寄与率（%）	28.8	41.2	50.2
信頼性係数α	0.850	0.721	0.783

表4　母性意識質問項目の因子分析（3歳）　N=885

因子・項目	負荷量 因子1	因子2	因子3
因子1：育児不安・不満感（9項目）			
3．毎日毎日，同じことの繰り返ししかしていないと思う	0.489		
5．ひどくがっかりしたときには，なかなか気分転換ができない	0.635		
6．育児の自信がなくなる	0.629		
8．自分のやりたいことができなくて焦る	0.699		
10．自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう	0.544		
12．子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う	0.698		
14．育児ノイローゼになる心境に共感できる	0.587		
16．自分の関心・時間を子どもにとられて視野が狭くなる	0.664		
17．何となくいらいらする	0.673		
因子2：育児満足感（6項目）			
1．育児は楽しい		0.678	
4．育児は有意義な仕事である		0.670	
7．子どもをもって自分も成長した		0.630	
9．子どもはいとおしい		0.619	
13．わが子（歳）は，愛情に素直に反応する		0.544	
15．充実感がある		0.676	
因子3：夫のサポート感（3項目）			
2．子どものことについて夫婦でよく話し合う			0.736
11．夫は，一緒に子育てをしてくれている			0.887
18．夫は家事に協力的である			0.820
固有値	4.784	2.222	1.717
寄与率（%）	26.6	12.4	9.5
累積寄与率（%）	26.6	38.9	48.5
信頼性係数α	0.824	0.738	0.787

表5　テストの信頼性－1回目と2回目との相関関係－

対象	因子	1回目 平均（SD）	2回目 平均（SD）	相関係数
乳児 N=78	育児不安・不満感	21.3(4.9)	21.0(5.2)	0.959
	育児満足感	22.5(1.7)	22.5(1.7)	0.810
	夫のサポート感	9.9(1.7)	10.1(1.7)	0.913
1歳6カ月 N=105	育児不安・不満感	22.1(4.5)	21.3(4.8)	0.863
	育児満足感	21.4(2.1)	22.1(2.0)	0.764
	夫のサポート感	9.4(2.2)	9.6(2.2)	0.893
3歳 N=75	育児不安・不満感	21.4(4.3)	20.5(5.1)	0.778
	育児満足感	21.2(2.3)	22.1(2.2)	0.829
	夫のサポート感	9.3(2.1)	9.5(2.3)	0.927
合計 N=258	育児不安・不満感	21.7(4.6)	21.0(5.0)	0.870
	育児満足感	21.7(2.1)	22.2(2.0)	0.792
	夫のサポート感	9.5(2.0)	9.7(2.1)	0.909

月，1歳6カ月，3歳の3時点において，因子別各項目と因子別総得点との間に高い正の相関が認められた。

（4）因子間の相関（表7）

因子間の相関係数をみると，3時点において「育児不安・不満感」と「育児満足感」および「夫のサポート感」との間に負の相関関係，「育児満足感」と「夫のサポート感」との間には正の相関関係が統計的には有意であったが，相関係数は0.2～0.4と低かった。

表6　項目得点と因子得点との相関関係

項目・因子 ＼ 相関係数	4カ月 N=815	1歳6カ月 N=853	3歳 N=885
因子1：育児不安・不満感（9項目）			
3．毎日毎日，同じことの繰り返ししかしていないと思う	0.509	0.609	0.556
5．ひどくがっかりしたときには，なかなか気分転換ができない	0.677	0.654	0.636
6．育児の自信がなくなる	0.656	0.700	0.641
8．自分のやりたいことができなくて焦る	0.643	0.683	0.669
10．自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう	0.612	0.638	0.628
12．子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う	0.670	0.716	0.700
14．育児ノイローゼになる心境に共感できる	0.644	0.658	0.606
16．自分の関心・時間を子どもにとられて視野が狭くなる	0.677	0.693	0.651
17．何となくいらいらする	0.722	0.734	0.677
因子2：育児満足感（6項目）			
1．育児は楽しい	0.624	0.712	0.726
4．育児は有意義な仕事である	0.704	0.710	0.722
7．子どもをもって自分も成長した	0.632	0.650	0.663
9．子どもはいとおしい	0.518	0.516	0.568
13．わが子（　歳）は，愛情に素直に反応する	0.479	0.532	0.505
15．充実感がある	0.709	0.744	0.751
因子3：夫のサポート感（3項目）			
2．子どものことについて夫婦でよく話し合う	0.716	0.787	0.783
11．夫は，一緒に子育てをしてくれている	0.828	0.894	0.884
18．夫は家事に協力的である	0.871	0.823	0.855

表7　因子間の相関係数

因　　子	相関係数 4か月	1歳6カ月	3　歳
育児不安・不満感と育児満足感	−0.368**	−0.431**	−0.379**
育児不安・不満感と夫のサポート感	−0.134**	−0.170**	−0.181**
育児満足感と夫のサポート感	0.293**	0.265**	0.259**

P<.01

Ⅳ 考　　察

乳幼児をもつ母親の母性意識を分析した結果，「育児不安・不満感」，「育児満足感」，「夫のサポート感」の3つの因子が抽出された。「育児不安・不満感」9項目，「育児満足感」6項目，「夫のサポート感」3項目について，項目の妥当性と信頼性について検討した結果，質問紙の有用性が認められた。しかし，3因子の測定としての妥当性については今後さらに検討が必要である。

中津ら（1996）は育児不安の高い母親は育児に対して否定的な意識が強く，対人関係の希薄化がみられ，一方育児不安が低い母親は育児に対して肯定的なとらえ方をしていたと報告し，両角ら（2000）は子ども虐待に対する意識と育児不安との相関があると報告している。従って，母性意識質問紙の活用によるハイリスクマザーの早期発見と早期介入が虐待予防においても重要であると考える。また，本質問紙は乳幼児健診の場において実施可能で，母親への負担が少なく，心理相談につなげていくためのハイリスクマザースクリーニングとして有効である。さらに，母親の育児不安の軽減や子どもに対するかかわりの改善により，育児満足感を高

める教室への参加を早期に勧めていく対象を選択するのにも活用できる。

しかし，木村ら（1985）は育児不安が低いから問題がないとは限らず，子どもに関心の薄い母親は，育児不安兆候を表しにくく，育児全般の問題を考える上では，こうした無関心な母親の問題も無視できないと述べている。従って，育児不安尺度だけでなく育児満足尺度の視点からのハイリスクマザーの把握も必要である。また，牧野（1982）は育児不安の程度に関連する大きな要因の一つに夫婦関係があり，夫との関係において充実感と幸福感を感じることができ，夫も子育てを一緒にしてくれていると感じることのできる妻は望ましい育児態度をとることができると報告した。さらに，牧野ら（1989）の調査では就業の有無にかかわらず，夫婦が普段話し合う時間が長いほど妻の育児不安が低かった。すなわち，夫の存在が妻の育児不安感や育児満足感に強く影響すると考えられ，夫のサポート感についても把握が必要である。

以上のことから，育児不安感が高く，育児満足感が低く，夫のサポート感の低い母親を早期に把握し，ハイリスクマザーへの早期介入のために本質問紙の活用が可能であることが明らかとなった。

V おわりに

家庭や地域における子育て機能の低下や育児不安・不満に起因した虐待の増加が社会問題となってきている。虐待により死亡した子どもの年齢は0～1歳がもっとも多く，4歳以下が全体の約6割を占めている状況からみると，乳児期からの早期介入が必要である。乳幼児のメンタルヘルスを考える上で，育児不安の高い母親，育児満足感の低い母親，夫のサポート感の低い母親などのハイリスクマザーの早期発見と早期介入が重要であり，乳幼児健診の場において母性意識質問紙の活用による指導の成果が期待できる。

文　　献

川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次鈞也　1997　育児不安に関する臨床的研究Ⅲ－育児困難感のアセスメント作成の試み－　日本総合愛育研究所紀要，33，35－56.

川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村敬・谷口和加子・恒次鈞也・安藤朗子　1998　育児不安に関する臨床的研究Ⅳ－育児困難感のプロフィール評定試案－　日本子ども家庭総合研究所紀要，34，93－111.

川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村敬・谷口和加子・恒次鈞也・安藤朗子　1999　育児不安に関する臨床的研究Ⅴ－育児困難感のプロフィール評定質問紙の作成－　日本子ども家庭総合研究所紀要，35，109－143.

川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村敬・安藤朗子・谷口和加子・佐藤紀子・恒次鈞也　2000　育児不安に関する臨床的研究Ⅵ－子ども総研式・育児支援質問紙（試案）の臨床的有用性に関する研究－　日本子ども家庭総合研究所紀要，36，117－138.

川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁他　2001　育児不安のタイプとその臨床的研究Ⅶ－子ども総研式・育児支援質問紙（ミレニアム版）の手引きの作成　日本子ども家庭総合研究所紀要，37，159－180.

木村汎・磯田朋子・内田昌江　1985　育児不安の社会学的考察－援助システムの確立に向けて－　大阪市立大学生活科学部紀要，33，231－243.

厚生省監修　1999　厚生白書（平成11年版）社会保障と国民生活　(株)ぎょうせい　54

久保由美子・長尾秀夫　1996　環境的リスク児の早期発見に関する研究－家庭環境要因を中心に－　特殊教育学研究，34(3)，45－54.

久保由美子・長尾秀夫　1997　環境的リスク児の早期発見と早期介入に関する研究－地域保健活動の場におけ

る試みー　小児保健研究，56(5)，627−632.
久保由美子・長尾秀夫　1999　環境的リスク児の早期介入に関する研究ー地域保健活動の場における試みー　発達障害研究，20(4)，306−315.
牧野カツコ　1982　乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉　家庭教育研究所紀要，3，34−56.
牧野カツコ　1988　育児不安の概念とその影響要因についての再検討　家庭教育研究所紀要，10，24〜26.
牧野カツコ　1989　親の就業を中心とした社会参加と親役割に関する調査報告書　東京都生活文化局
中津郁子・高梨一彦・佐々木保行　1996　幼稚園生活における幼児の不安感情に関する研究ー第2報　母親の育児不安との関連についてー　小児保健研究，55(4)，530−536.
小川雄之亮　2002　出生前小児保健指導の意義と実際（特集健やか親子21と周産期医学ー小児医療・保健の立場からー子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減）　周産期医学，32(5)，683−686.
小野けい子・宮内清子・久保由美子　1993　現代女性の育児行動と母性意識ー有職女性と専業主婦の比較ー　現代女性の育児行動と母性意識研究班　平成4年度えひめ女性財団助成研究報告書，95−196.
両角伊都子・角間陽子・草野篤子　2000　乳幼児をもつ母親の育児不安に関わる諸要因ー子どもの虐待をも視野に入れてー　信州大学教育学部紀要，99，87−98.
Sameroff, A. J., Seifer, R., Baldwin, A. and Baldwin, C. 1993 Stability of intelligence from preschool to adolescence : The influence of social and family risk factors. Child Development, 64, 80−97.
吉田弘道・山中龍宏・巷野悟郎他　1999　育児不安スクリーニング尺度の作成に関する研究ー1・2か月児の母親用施策モデルの検討ー　小児保健研究，58(6)，697−704.
吉永陽一郎　2002　育児不安軽減への周産期医療関係者の役割（特集健やか親子21と周産期医学ー小児医療・保健の立場からー　子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減）　周産期医学，32(5)，679−682.